

マルコによる福音書7章 「壊される戒めの壁」

1A 律法主義の行き詰まり 1-23

1B 口先だけの敬い 1-13

1C 人の言い伝え 1-5

2C 神の戒め 6-13

2B 内側からの汚れ 14-23

2A 異邦人の地での宣教 24-37

1B パン屑をいただく信仰 24-30

2B 二重苦の癒し 31-37

本文

マルコによる福音書7章を開いてください。私たちが、今のイエス様の宣教の状況のことを思い出してみましよう。大きなことが起こりました、ヘロデがバプテスマのヨハネを斬首したことです。ヘロデは、ペレアという地方とガリラヤ地方を治めていましたが、数多くの人々がイエス様について行って、大きな動きになっているのを見て、脅威に感じています。ルカによる福音書に、パリサイ人がイエス様のところに来て、ヘロデがあなたを殺そうとしているという話をしています。そうした具体的な危険もありますし、また、そのイエス様についてくる大きな動きそのものが、ご自身の意図しておられることとは全く別の方向に動きかねない状況でした。イエス様が、病を治す魔法師のように見ていたし、「この人であれば、世直しができるかもしれない」ということで、イエス様を持ちあげて王にしようとも考える動きが出てきました。

しかし、イエス様は一人一人に仕えられる方でありました。人々に見せつけて、その力でもってご自身について行くようには考えておられません。人々に仕えて、最後には、ご自身の命の対価をもって人々を贖うことに関心を持っておられました。ですから変な動きになっています。そこから抜け出す意味でも、イエス様がこれまでになかったところに行かれました。異邦人の地です。それが後半、24節以降に出てきます。その前に、イエス様が大胆な宣言を行われました。食物規定について、外から内に入るのは人を汚さないというご発言です。ユダヤ人と異邦人の間の仕切りとなっていた、この食物規定がイエス様にあってその規定の本当に意味する所を実現したのです。このことについては、後で詳しく説明します。

1A 律法主義の行き詰まり 1-23

今は、ユダヤ人たちの間にあった律法主義が、神に近づくことを妨げていた問題について見て行きます。

1B 口先だけの敬い 1-13

1C 人の言い伝え 1-5

1 さて、パリサイ人たちと、エルサレムから来た何人かの律法学者たちが、イエスのもとに集まった。

イエス様と弟子たちは今、ガリラヤ湖近辺にいます。ゲネサレ平原で人々を癒す働きをイエス様は行われていたので、その近くにいたのでしょう。そこから、パリサイ人たちがまず、来ました。パリサイ人は、分離派と言ってよいでしょう。汚れたものから分離することによって、神に聖いことを証明することに情熱をかけていました。そして律法学者はその名の通り、律法についての学者です。律法学者はエルサレムからわざわざ来ました。イエスが行われていることを見て、それが神からのものではないこと、つまり偽物の預言者であることを追及するために来ています。

2 彼らは、イエスの弟子のうちのある者たちが、汚れた手で、すなわち、洗っていない手でパンを食べているのを見た。3 パリサイ人をはじめユダヤ人はみな、昔の人たちの言い伝えを堅く守って、手をよく洗わずに食事をするのではなく、4 市場から戻ったときは、からだをきよめてからでないと食べることをしなかった。ほかに、杯、水差し、銅器や寝台を洗いきよめることなど、受け継いで堅く守っていることが、たくさんあったのである。

汚れた手でパンを食べることについて、日本語では同じ感じですが、二つの読み方がありますね。「よごれる」と「けがれる」です。よごれる、というのは、衛生上の汚れです。けがれる、というのは、儀式的によごれることです。ここでは後の方です、儀式的に汚れています。どのように手を洗ったかと言いますと、手を上に向けて肘までしたたるようにします。そして、最後の肘のほうに溜まった水にも汚れがあるとみなしていたので、反対にして肘のほうから手に流して、そうやって汚れを取るのです。食事をする時はこれを綿密に行いました。

この理由は、午前礼拝でも話しましたが、食物規定を守っていない異邦人との接触があるからです。「汚れ」というものを、伝染病のようなイメージで考えていただけると良いでしょう。レビ記 11章に食物規定があります。反芻しないもの、ひずめのない動物は食べられない、また鱗のない魚介類も食べられず、地を這うものも食べられません。猛禽類も食べてはいけません。これらのことは、イスラエルがその規定を守ることによって自分たちが、他の国々とは異なり、聖め別たれた民なのだということを示すためです。

けれども、異邦人はそれらの規定を守りませんから、異邦人が接触するものであれば、それも汚れていて、ですから、自分が異邦人に接触するところに行くのは自分を汚すことになりました。異邦人の地に入って、そこから出て行く時は、足のちりを払い落とすということをこの前、学びましたね。市場のことがここに書かれていますが、市場には肉が売られていて、異邦人は、その肉は

そばにある偶像に捧げてから、店頭に出します。そこからはユダヤ人は買いませんが、なにやらかにやらで、異邦人がいつ汚れを持ってくるかわからない市場のようなところでは、家に帰ったら、体全体を水で洗い清めます。そして、食事に使う食器は口に入るものですから、入念に清めたのです。大事なのは、食べるということが、親しく交わることを意味していたことです。同じ食べ物が体に入ることで、一体化することを意味していました。ですから、食べるものには細心の注意を払ったのです。

その他、寝床が書かれていますが、レビ記には女性の不浄の器官が書かれていますが、男性も漏出物があってそれが汚すとありますから、体液によって汚れが移るということで寝台にも注意を払ったのです。

5 パリサイ人たちと律法学者たちはイエスに尋ねた。「なぜ、あなたの弟子たちは、昔の人たちの言い伝えによって歩まず、汚れた手でパンを食べるのですか。」

ここで大事なのは、パリサイ人たちが厳格に守っていたのは律法そのものではなく、「昔の人たちの言い伝え」でありました。モーセの律法には書いてありませんが、昔の人々からの言い伝えがあります。言い伝えそのものが悪いものではありません。使徒パウロは、使徒たちの教えについて、それを言い伝えと呼び、それを堅く守ることについて教えている箇所があります(1コリ 11:2)。私たちが聖書に書かれていることを見て行き、それを実践していこうと努力しているのは、まさに使徒たちの言い伝えを守ろうとしていることです。ですから、言い伝えそのものが間違っているのではなく、神のことは、神の戒めではないものに固執することが間違っています。汚れた手でパンを食べることは、神のことに書かれていません。ミシュナと呼ばれる口伝律法だったのです。

2C 神の戒め 6-13

6 イエスは彼らに言われた。「イザヤは、あなたがた偽善者について見事に預言し、こう書いています。『この民は口先でわたしを敬うが、その心はわたしから遠く離れている。7 彼らがわたしを礼拝しても、むなしい。人間の命令を、教えとして教えるのだから。』8 あなたがたは神の戒めを捨てて、人間の言い伝えを堅く守っているのです。」

「偽善者」であるとイエス様は責めておられます。偽善者とは、仮面をかぶるような意味合いがあり、自分はそうではないのに、あたかも神を敬っているように人前では見えることです。そして、イザヤの預言を引用されました。イザヤが、不法に満ちているイスラエル人たちが、それでエルサレムでの神殿礼拝を守り行なっていたので、口先では神を敬うが、心が遠くに離れていると預言したところを、取り上げました。もし私たちが、御霊によって導かれて、心をへりくだらせ、主を敬い、あがめるということをやめて、それでただ教会の活動について行っているのであれば、それは、人の教えに従っているだけで、神の戒めを守っていないこととなります。義務的にしなければいけない

ことをこなしていく態度。そして、そうした形式主義のような態度は、必ず自己中心的になります。

9 またイエスは言われた。「あなたがたは、自分たちの言い伝えを保つために、見事に神の戒めをないがしろにしています。10 モーセは、『あなたの父と母を敬え』、また『父や母をののしる者は、必ず殺されなければならない』と言いました。11 それなのに、あなたがたは、『もし人が、父または母に向かって、私からあなたに差し上げるはずの物は、コルバン(すなわち、ささげ物)です、と言うなら——』と言って、12 その人が、父または母のために、何もしないようにさせています。13 このようにしてあなたがたは、自分たちに伝えられた言い伝えによって、神のこぼを無にしています。そして、これと同じようなことを、たくさん行っているのです。」

人の言い伝えの恐ろしさは、一つに、神の戒めをなおがしろにしているのに、自分は神を敬っているとさせることです。もう一つは、自分の罪を隠す道具にさえなるということです。ここでは、「コルバン」という言葉をイエス様は挙げておられます。コルバンとは、神に捧げられた物という、ラビが使っていた、云わば業界用語です。父と母を養うべき自分が、それを拒む時に、コルバンになりましたといえ、その義務が免除されました。こんなふざけたような話はありません。主に捧げていますから、と言いながら、主に命じられている父母を敬いなさいという命令を行いません。人の言い伝えは、心を取り扱っていないので、自分の悪い心が放置されたまま、それさえも正当化して、神に敬っていると装うことができるのです。これをイエス様は忌み嫌われました、偽善であるとされました。

2B 内側からの汚れ 14-23

14 イエスは再び群衆を呼び寄せて言われた。「みな、わたしの言うことを聞いて、悟りなさい。15 外から入って、人を汚すことのできるものは何ともありません。人の中から出て来るものが、人を汚すのです。」16 (聞く耳があるなら、聞きなさい。)

イエス様は、譬えを用いられていますね。以前の、四つの土に落ちる種蒔きの譬えから、ずっと、「聞く人たちの理解に応じて語る」という方法が使われていました。群衆には、何か、ああ、いい話だ、で終わってしまうのですが、近くにいる弟子たちはそれが何を意味するかが分かる、というものです。ところが分からない、でいます！

17 イエスが群衆を離れて家に入られると、弟子たちは、このたとえについて尋ねた。18 イエスは彼らに言われた。「あなたがたまで、そんなにも物分かりが悪いのですか。分からないのですか。外から人に入って来るどんなものも、人を汚すことはできません。19 それは人の心には入らず、腹に入り排泄されます。」こうしてイエスは、すべての食物をきよいとされた。

とても慰められるのは、イエス様の真理について悟ることができるのは、自分たちの能力ではな

ということです。イエス様は弟子たちには、多くの時間を割いて悟らせようとしていますが、それでも分からない、鈍い者たちです。前回、五千人の給食の奇跡の意味が分からず、水の上を歩かれていたイエス様を見て、恐怖に包まれたことを思い出してください。では、イエス様に選ばれたということは何か？恵みによる選びとしか、言いようがありません。その中で、何度でもイエス様に尋ねることができるというのが、弟子と群衆の違いでしょうか？ですから、分からなくとも、悟りが遅くともあきらめてはいけません。イエス様は何度、尋ねて来ても、同じ過ちを繰り返しても近づいてくださる方です。

そして、マルコが注釈を入れていますが、「こうしてイエスは、すべての食物をきよいとされた。」ということです。これまでのユダヤ教では、食物規定がありました。よろしければ、レビ記 11 章の聖書講解の原稿を読むか、聞いて見るかしてみてください。これはユダヤ人にとっては、きわめて重要なことで、特に旧約聖書と新約聖書の間期の時代、ギリシア人の王アンティオコス・エピフェネスによって、豚を食べることを強要されました。ですから、ユダヤ人にとって何を食べるかということは、神の命令を守るという事の他に、異邦人の支配を受けたくないというプライドもあったことでしょう。その中で、イエス様は、人の食べるものは排泄されるのだと宣言されたのです。

そのユダヤ人の葛藤について、午前礼拝でもお話ししましたが、ペテロ自身がそうでした。ヤツファにいた時に、幻を見ました。「10:11-15 すると天が開け、大きな敷布のような入れ物が、四隅をつるされて地上に降りて来るのが見えた。その中には、あらゆる四つ足の動物、地を這うもの、空の鳥がいた。そして彼に、「ペテロよ、立ち上がり、屠って食べなさい」という声が聞こえた。しかし、ペテロは言った。「主よ、そんなことはできません。私はまだ一度も、きよくない物や汚れた物を食べたことはありません。」すると、もう一度、声が聞こえた。「神がきよめた物を、あなたがきよくないと言ってはならない。」ペテロも、いきなり天からの幻で屠って食べなさいと言われたら、咄嗟に、自分はユダヤ人として生きてきたことを主に訴えたのです。これほど、ユダヤ人であるということが食物規定、コシェルを守るものなのだとすることが切り離せなかったのです。

そして、ロマ書を見ますと、マルコはローマにいるキリスト者のことを意識してこの福音書を書いています。そこには、「14:1 信仰の弱い人を受け入れなさい。その意見をさばいてはいけません。ある人は何を食べてもよいと信じていますが、弱い人は野菜しか食べません。」と言っているのです。イエス様を信じて、それでも市場で売られている肉を食べると、それで体が汚れてしまうという思いになる人々がいたということですね。それだけ、深くユダヤ人の心に沁み込んでいたものでしょう。

しかし、新約聖書の教えは、イエス・キリストにあつて、その流された血潮と御霊の働きによって、洗い清められ、それゆえ食物規定の目的はイエス様にあつて成就したと考えます。安息日の戒めもそうですが、「コロ 2:17 これらは、来るべきものの影であつて、本体はキリストにあります。」とあ

ります。キリストの流された血が私たちに云わば、靈的に流れて来る時に、聖なる者とされており、義なる者として認められているのです。ですから、そこにおいて差別はなく、ユダヤ人だけでなく、異邦人も共に聖めにあずかることができるというものです。隔ての壁が壊れたのです。「エペ 2:13-16 しかし、かつては遠く離れていたあなたがたも、今ではキリスト・イエスにあって、キリストの血によって近い者となりました。実に、キリストこそ私たちの平和です。キリストは私たち二つのものを一つにし、ご自分の肉において、隔ての壁である敵意を打ち壊し、様々な規定から成る戒めの律法を廃棄されました。こうしてキリストは、この二つをご自分において新しい一人の人に造り上げて平和を実現し、二つのものを一つのからだとして、十字架によって神と和解させ、敵意を十字架によって滅ぼされました。」

ですから、教会で、ユダヤ人と異邦人は共に聖餐にあずかれましたし、また普通に共に食事をすることができました。彼らの間に、キリストの血によって隔ての壁が壊されたのです。私たちは後で聖餐式にあずかりますが、私たちもキリストの前で自分の罪を認め、その流された血潮で清めていただき、キリストの裂かれた肉を共にいただくことによって、その中で一体となることができるのです。

20 イエスはまた言われた。「人から出て来るもの、それが人を汚すのです。21 内側から、すなわち人の心の中から、悪い考えが出て来ます。淫らな行い、盗み、殺人:22 姦淫、貪欲、悪行、欺き、好色、ねたみ、ののしり、高慢、愚かさで、23 これらの悪は、みな内側から出て来て、人を汚すのです。」

イエス様は、これらの内側から出て来るものが、人を汚すとはっきりとされています。これらのことは、外側で何か行ったから清められるものではありません。内側からわんさと、汚水のように出てきます。だから、神の戒めはそもそもが、私たちの心のところに向かうものだったのです。神の命令は、靈において語られて、神との愛の関係があるからこそ、それに従うことができるのです。神の御言葉が語られて、それを聖霊によって悟ります。神の真理が自分の靈に入って来ます。その清められた心、一新された心で、主の言われたことに従うことができます。

2A 異邦人の地での宣教 24-37

そこで 24 節以降の話に入ります。イエス様は、異邦人の多くいる地に向われます。

1B パン屑をいただく信仰 24-30

24 イエスは立ち上がり、そこからツロの地方へ行かれた。家に入って、だれにも知られたくないと思っておられたが、隠れていることはできなかった。

ツロであります。イスラエルの北部より少し北のところにあります、今のレバノンの南部に位置

する所です。そこより少し北にはシドンがあり、そこはフェニキア地方とも言いました。ここで悪名高いのは、イゼベルの出身地だということです。彼女がシドン人の王の娘であり、そこでのバアル信仰をイスラエルに夫アハブを通して持ち込んだという有名なできごとがあります。そしてツロは、エゼキエル書で、世界貿易をして巨大な富を積み上げた町であり、神によって一夜にして滅ぼされるという裁きの宣告も受けています。イエス様の時代にも、ツロやシドンは異教が盛んだったそうです。しかし、興味深いのは、神はそういったところに預言者を遣わしたことです。そう、エリヤです。アハブはこの地域からイスラエルにバアル信仰を持ち込みましたが、神はエリヤを遣わされた、シドンのツアレファテにいる、貧しいやもめのところに行き、そこでパンの粉も油の壺も尽きることのない奇跡を行いました。神は、恵みの神であることがよく分かります。

イエス様は、「だれにも知られたくないと思っておられた」とあります。とてつもなく多くの群衆から離れ、また、ヘロデの監視の目からも離れるために、異邦人の地に行かれました。そこで、弟子たちと時間を過ごし、自分たちだけの時間を持ちたかったのだと思います。ところが、イエス様の噂はユダヤ人たちの間だけではなく、その周辺地域にも広がっています。そして、そこでは完全にメシアであるとか、そういったことではなく、ただ奇跡を行う人が来たのだらうということです。

25 ある女の人が、すぐにイエスのことを聞き、やって来てその足もとにひれ伏した。彼女の幼い娘は、汚れた霊につかれていた。26 彼女はギリシア人で、シリア・フェニキアの生まれであったが、自分の娘から悪霊を追い出してくださいようイエスに願った。27 するとイエスは言われた。「まず子どもたちを満腹にさせなければなりません。子どもたちのパンを取り上げて、小犬に投げてやるのは良くないことです。」

イエス様の使命には、順番がありました。ご自分がイスラエルの救いのために来られて、そして異邦人にも光となられるという使命です。「イザ 42:6 あなたを民の契約として、国々の光とする。」分かり易く例えるなら、私たちは今、西日暮里に教会を持っていますが、日本語の話せない外国の人がどどと来たらどうするのでしょうか？「私たちが導かれているのは、日本人の人で、しかもこの地域の人たちです。」と心で思っているのが普通でしょう。けれども、主はもしかしたら、さらに向こうの人々、言葉や文化や民族の壁を超えてそういったことを行われようと計画しておられるのかもしれない。そういった状況です。イスラエルとの神の契約がありますから、「まず子どもたちを満腹にさせなければなりません。」と言われたのです。そしてここで言われている、「小犬」とは異邦人のことです。

28 彼女は答えた。「主よ。食卓の下の小犬でも、子どもたちのパン屑はいただきます。」

機知に富んだ女性です。そして、信仰に満ちています。食卓では、当時、手拭きのようなものはありませんでした。紙ナプキン、紙は希少な資源ですからもちろん存在せず、どうしていたかと

いうと、最後に残ったパンの一片です。それで手に着いている油とか、そういったものを拭うのです。それを、飼っている小犬ちゃんに投げるんですね。イエス様が言われたことを受けとめて、それをもって異邦人である自分にも、そのおこぼれにあずかることができると訴えたのです。

29 そこでイエスは言われた。「そこまで言うのなら、家に帰りなさい。悪霊はあなたの娘から出て行きました。」³⁰ 彼女が家に帰ると、その子は床の上に伏していたが、悪霊はすでに出ていた。

遠くのところから、イエス様は悪霊を追い出されました。ご自身はそこに行かず、言葉だけ与えて悪霊を追い出されました。マタイによる福音書では、百人隊長が自分の僕を癒していただくとき、おことばだけで癒していただいたことがありましたね。まだ異邦人に近づいて働かれる時ではなかったのですが、それでも主は、彼らの中から信仰を引き出しておられたのです。イエス様を体験できるのは、紛れもなく信仰によるものなのです。そうです、私たちは信仰によって清められます。みことばを聞いて、それを、信仰を持って聞いて、そこにはユダヤ人も異邦人も差別はありません。

私たちは、いろいろな理由を付けて、信仰を働かせない言い訳にしています。けれども、神はこのように恵みによって逆転現象を起こされる場合があります。例えば、私たちのよく知っている宣教師は、学歴が高卒で、資格は特にありません。免許を剥奪されたということはありませんが。けれども、今は、教会付属の幼稚園と小学校、そして英会話学校を経営しています。彼は、与えられたことに忠実に従い、自分ができるとかそういうことをぶつぶつ言わず、ただ与えられた機会を用いて、果敢に英語教育に取り組みました。何かできることがあると、むしろそれが妨げになることさえあります。パリサイ派や律法学者がそうですね。異邦人はもちろんのこと、ユダヤ人の間でさえ、神の救いを自分たちに壁を作って伝えられていませんでした。いや、彼ら自身の救いが怪しかったのです！ことを起こすのは神なのです、私たちは心が清められて、ただ神を信じることしかできません。そして神の恵みを待ち望むのです。

2B 二重苦の癒し 31-37

31 イエスは再びツロの地方を出て、シドンを通り、デカポリス地方を通り抜けて、ガリラヤ湖に来了らされた。

イエス様は、意図的にヘロデ・アンティパスの支配する領域を避けておられます。シドンはツロの北にあり、それからガリラヤ湖の東にあるデカポリス地方に来て、そしてガリラヤ湖方面に戻って来ておられます。そこは、ヘロデ・アンティパスではなく、兄弟のヘロデ・ピリポが支配しているところですが、ピリポの支配下であれば、アンティパスの監視の目は届いていませんので安全です。

32 人々は、耳が聞こえず口のきけない人を連れて来て、彼の上に手を置いてくださいと懇願した。

33 そこで、イエスはその人だけを群衆の中から連れ出し、ご自分の指を彼の両耳に入れ、それから唾を付けてその舌にさわられた。

二重苦の人が連れて来られました。おそらく、ここに連れて来た人々、またこの二重苦の人自身もユダヤ人ではないかと思われます。今、デカポリス地方にいるので異邦人が大半なのですが、それでもユダヤ人たちもいました。なぜそういえるのかと言いますと、口が利けないことは、単なる病、障害ではなく、この病を癒すのはメシアが来られたことを示すものだったからです。「イザ 35:6 そのとき、足の萎えた者は鹿のように飛び跳ね、口のきけない者の舌は喜び歌う。荒野に水が湧き出し、荒れ地に川が流れるからだ。」

そしてイエス様は、ヤイロの娘の時に行われたように、この人を群衆から引き離しておられます。イエス様が、いかにしもべであったかを思われます。イエス様は、癒しを売りにした手品師か、魔術師のような存在に祭り上げられる危険さえあります。けれども、主は、人々に知られないようにして初めて、ご自分の持っている力を使って、必要のある人々、個々の人に仕えられます。うれしくないでしょうか、主は他の人たちをも引き離して、私たち個々の必要に仕えてくださるのです。

ところで、どこの人を癒される時に、どうやってそれを伝えればよいか？という課題があります。イエス様が語ろうにも、耳で確認することはできません。そこでイエス様はジェスチャーを使われています。「ご自分の指を彼の両耳に入れ」るのは、「これから、両耳を開くからね」というジェスチャーです。そして、「唾を付けてその舌にさわられた」というのは、「これから舌のもつれを解くからね。」というジェスチャーです。唾をつけるというのは、私たちには「えっ？」とちょっとドン引きしますが、当時は癒しを与えるよ、大丈夫だよ、という安心感を与えるために行ったのではないか？と思われます。イエス様は、次の章、マルコ 8 章で、目の見えない人の両目に唾を着けておられます。またヨハネ 9 章、生まれつきの盲人の目を、唾で作った泥を目に塗られました。

興味深いのは、先ほどは遠い距離から悪霊につかれた娘を癒され、ここでは唾まで舌につけて、それで安心感を与えておられるということです。全く異なる方法ではありますが、それぞれがイエス様への信頼の中で、信仰をそれぞれが働かせてその力を受けています。これが、神のなさることです。いろいろな方法を神が使われるということです。ご自身を信頼することが最も大事であって、その方法はいろいろあるのです。だから、私たちは常に、主が私たちに何を望んでおられるのか、求めて行く必要があります。

34 そして天を見上げ、深く息をして、その人に「エパタ」、すなわち「開け」と言われた。35 すると、すぐに彼の耳が開き、舌のもつれが解け、はっきりと話せるようになった。

天を見上げているのは、五千人の給食の時も行われました。パンも、そしてここでの癒しも、天

からの恵みなのだということを示しておられます。そして、「深く息」をしておられるのは、どういうことなのでしょう？天を見上げて、父なる神と共にイエス様は語られたのだと思います。主が、かつて「良しとされた」と言われてお造りになされた被造物、そしてわれわれに似せて人を造ろうと言われた被造物が、今、罪の結果としてこのような状況になっています。ラザロが死んでしまった時、人々が泣いている時にご自身も泣かれ、霊の憤りを感じられて、それで、「ラザロよ、出てきなさい！」と大声で叫ばれた時もそうだったのでしょう。被造物がサタンの支配下の中で痛めつけられているのです。そこで、主が解き放たれます。「開け」と言われましたが、エパタ、アラム語を言われています。ガリラヤやユダヤの地域では、当時、アラム語が会話の中では使われていました。たぶん、イエス様の口の動きで、この人も何をイエス様が言われたか聞き取れたのではないかと思います。

36 イエスは、このことをだれにも言ってはならないと人々に命じられた。しかし、彼らは口止めされればされるほど、かえってますます言い広めた。37 人々は非常に驚いて言った。「この方のなさったことは、みなすばらしい。耳の聞こえない人たちを聞こえるようにし、口のきけない人たちを話せるようにされた。」

イエス様は、何度となく、「だれにも言ってはならないと人々に命じられた」と言われています。ここから多くのことを学びます。イエス様の働きは、マルコの福音書では特に、「主のしもべ」としての働きであったということです。イザヤの預言の中に、主のしもべとして選ばれたメシアは、「彼は叫ばず、言い争わず、通りでその声を聞かせない。傷んだ葦を折ることなく、くすぶる灯心を消すこともなく、真実をもってさばきを執り行う。」とあります。人には、伝えられないようにして人々に仕えられる姿です。人気を博して、影響力をもって広まるのではなく、ただ仕えることによって広まります。当時のユダヤ人はメシアと言え、軍事力を持っている救世の王というイメージでしたが、もちろんそれをもっておられません。けれども、ここに、彼らが「口止めされればされるほど、かえってますます言い広めた」とあります。イザヤの預言を続けて見ますと、「衰えず、くじけることなく、ついには地にさばきを確立する。島々もそのおしえを待ち望む。」とあるのです(42:1-4)。知られないように仕えておられるのに、いや、そのように仕えられるからこそ、世界に広がる力と影響力を持っていました。

主が力強く働かれているところを見ますと、そのような地味な働きが実に多いです。そして主に用いられている器に会いますと、気さくで、人間味があり、個人的に接することのできる人が多いです。神はいつも、そのように仕える者たちによってご自分の真理を世界に伝えられます。イエスが仕える方であり、そのイエスに仕える時に、ご自分の働きを世界に広げられるのです。